

カリキュラムの中核としての国際協力研修

リベラルアーツ学群
牧田 東一

1. 一人の学生の発言から

2002年、筆者は桜美林大学国際学部に着任した。そのときに、本来の国際交流論に加えて国際協力論とNGO論も受け持って欲しいと要請された。どちらもそれまでの国際学部にはない科目であり、学生のニーズを受けて科目新設が企画されたのだと思う。初めて国際協力に関する科目を開講した筆者の授業やゼミには、関心のある学生が集まってくることになり、それから毎年20人前後の国際協力に関心のあるゼミ生(3,4年生)を持つてきた。しかし、国際協力研修については当初ほとんど関わらなかった。研修に関心を持つようになったきっかけは、最初の年のゼミ生の一人の発言である。

その女子学生はバングラデシュの国際協力研修に参加していたが、秋学期になってゼミ論文のテーマを決める際に、「国際協力がいかに役に立たないか」について書きたいと言い出したのである。このテーマ自体は実際に成り立ちうるテーマではあるが、国際協力研修に参加した以外に国際協力について何も知らない学生が、研修の体験だけで「国際協力は役に立たない」と決めつけるのはいかにも浅薄な結論である。さらに驚いたことに、ゼミ論文を書こうとすると、この学生はバングラデシュについてほとんど何も知らないのである。これは彼女の個人的問題なのではない。その後の学年でも研修に参加した学生の多くが、実習した国の歴史、文化、開発問題などについて論文を書くに十分な知識を持っていなかった。

開発途上国での経験は若い学生にとって極めて貴重なものであり、それは狭い意味での国際協力の学習以上のものを持っている。異なる言語、文化、価値観、生活状況を自らの目で見るとは、自分の文化や価値観を相対化し、世界の中での自らの立ち位置を知るもっともよい手段であり、その経験は学生の人生にも大きな影響を与える。筆者は、その意味で、それまでの国際協力研修の成果について高く評価するものである。

しかしながら、筆者がこだわらざるを得なかったのは、国際協力研修をどのようにその後

の学習、具体的にはたとえば筆者の担当する国際協力の科目やゼミ論文・卒業論文と有機的につながるかという点である。すなわち、国際協力研修を国際協力のカリキュラムの中にどう位置づけるかという点であり、研修の中に学習的要素をどうやって盛り込むかである。

2. 国際協力研修に参加して

まず筆者がしたことは、国際協力研修に引率教員として参加してみることであった。実際に参加してみないとその良い点も問題点も分からない。そこで2005年の夏にフィリピン、2006年の春にバングラデシュとインドの研修に参加した。その後も、研修の内容を少しずつ変えていくことになったため、言いだしっぺの筆者は数年間に亘って研修に参加していくことになった。

上記の通り、国際協力研修には人間形成という大きな観点からよい教育的効果があることは明らかであった。しかし、筆者の関心事である国際協力の学習という観点からはいくつかの問題があった。それは、国際協力の実務に関わった人ならば、ほとんどすぐに合意できることである。第1に、ワークキャンプとして学生たちが参加していた現地での植林、トイレ作りなどの汗をかいて労働提供する「国際協力」の活動は、発想からしてやや時代遅れの感があり、専門的な国際協力の観点からはピントはずれであることである。第2に、インドを除いて、活動に集中するあまり地元の人々とのコミュニケーションが少なく、その国と人を知るという学習面での機会が限られていることである。第3に、例えば農村の貧困、都市のスラムや貧困層、児童労働、ジェンダー問題、参加型開発、母子保健など、国際協力の中での重要な課題について学生が学習したり、あるいは触れたりする機会が限られていることである。

そこで、筆者は徐々にワークキャンプ的要素を減らしながら、国際協力の学習につながるような機会を増やす方向で国際協力研修を改善していくことを提案していった。

3. ワークキャンプからスタディツアーへ

今日の国際協力において、特に先進国と途上国の格差の問題に関わる場合、とても重要なポイントは慈善的発想から公正・正義の実現への視点の転換である。途上国が貧しく紛争などに巻き込まれやすいのは、先進国にも責任の一端があり、地球社会全体の不公正の問題であるという認識である。さらに、現在の政治経済システムの恩恵を受けて豊かである先進国により大きな責任がある。この理解を持つことが、国際協力の出発点でなければ

ならない。「何かをしてあげる」「助けてあげる」という発想で国際協力を行うことは、むしろ依存の問題や、国際社会に存在する不正という本当の問題から目をそらすことにつながり、問題の真の解決には貢献しない。

以上の考えから、具体的な貢献を強調しがちなワークキャンプから、学習を中心とするスタディツアーへと基本的な考え方を変えようと考えた。フィリピンでは、都市部の貧困層（ストリートチルドレン、スラム住民、ゴミ山の人々）の生活を知ることと、農村・漁村の貧困について学ぶこと、さらにそれらと密接に関係する環境問題（都市ではゴミ・廃棄物、農村では環境破壊）を学ぶことを企画した。幸い、フィリピン有数の大学であるアテネオ・デ・マニラ大学との大学間協定が結ばれたことを契機として、同大が全ての学生に義務化しているボランティア活動に参加させてもらうことで、首都マニラの NGO に引き受けてもらう形で都市研修を開始することができた。地方研修については、本学助手の林加奈子さんのついで、同国最大の NGO である PRRM（フィリピン農村再建運動）に引き受けてもらって漁村の生活と鉱山開発による環境汚染を学ぶことになった。

バングラデシュはそれまでの YMCA との協力から、世界最大とも言われる BRAC という NGO との提携に変更し、マイクロファイナンス、母子保健、ノンフォーマル教育など、最も進んだコミュニティ開発の現場を学ぶ機会を得ることができた。現在でも、日本の大学で BRAC に研修を引き受けてもらっているところは学部段階ではおそらく他にない。インドについては、筆者が関わってから数年間「明日の会」という元 ELP 教員であったインド人女性が主催する NGO に引き受けてもらい、インド西部のプーネ近郊の農村でジェンダー問題などを中心に実習を行った。その後、林さんが探したバンガロールの MYRADA という NGO に変更されている。

現地引き受け先については、なるべく日本の NGO ではなく地元の NGO を選ぶようにして、日本人が「助けている」という視点で研修を組み立てるのではなく、地元の人々自らが開発に取り組んでいる姿を見てもらうことにしている。開発途上国にはどのような問題があり、その原因は何なのか、その解決に地元の人々はどのように取り組み、それを日本を含む国際社会がどのように支援しているのかという形で理解してもらうようにしている。

4. 体験から学習へ：事前、事後研修の重視

限られた期間の現地体験でなるべく多くを学べるように、また、帰国後に経験をさらなる学習に展開できるように、事前と事後の研修の充実をはかるように企画した。この部分については、林さんの工夫と実績が大きいので彼女の稿に譲りたいが、国際協力研修に参加した学生が国際協力関係の科目やゼミ、卒業論文などをとったときに、よりスムーズに

つながるようになったことは事実であり、事前・事後研修の効果は大きいということを実感している。

5. 実施体制の整備

筆者が関わる以前の国際協力研修は、当時国際交流センターの職員であった羽根田実さん（現在、幼稚園長）、高原幸治さん（同、学生課長）の自己犠牲を含む多大な貢献によって支えられてきた部分が大いと思う。他の事務職の人々も交代で引率に加わっていたが、国際協力のカリキュラムの一環として事前・事後研修、そして現地での通訳を含む学習指導を通常の事務職の方々に期待することは難しい。やはり、教員が事前事後研修の企画、指導、そして現地での引率・指導を実施することが望ましい。筆者も数年間に亘って引率を行ったが、毎年夏休み、春休みをこれに費やすことは個人的負担が大きすぎることから、助手の採用が望ましいと感じ、各方面に働き掛けて2006年度は小味かほるさん、2007年度からは林さんに指導していただいている。お二人とも国際協力の現場（カンボジア、フィリピン、インド等）で数年に亘って活動された方で現場に詳しい。

さらに、2008年度からは国際協力機構 JICA と大学との協定で JICA の現職の職員に教員として出向してもらう制度が始まり、2008年度は城水健さん、2009年度からは熊谷信広さんに国際協力研修全般について林さんと一緒に担当していただいている。JICA の世界各国の事務所のネットワーク、安全管理のノウハウなどの面で、国際協力研修は大きなバックアップを得ることができるようになった。

6. 実習科目の中心として：国際協力専攻のカリキュラム

2007年度から始まった LA 学群のなかで、国際協力は専攻として自立することになった。筆者が着任した2002年度に国際協力の科目が初めて出来たことから考えると、専攻になったことは大きな変化である。専攻を構想するに当たって、専攻の他の先生方とも一致した考え方は「現場重視」「体験から始める」ということである。これは、国際協力研修に参加した学生さんたちのその後の学習への意欲の高まりが著しいこと、さらにその効果は生活態度全般にも及ぶことなどを実感したからである。その意味で、国際協力研修は専攻カリキュラム構想の出発点であり、国際協力専攻の中心的な実習科目である。国際協力専攻を学びたい学生はなるべく国際協力研修に参加してほしいというのが教員一致した意見である。国際協力は現場から始まり、現場を支えるために組み立てられるのである。